

## ラオ・フレンズ小児病院

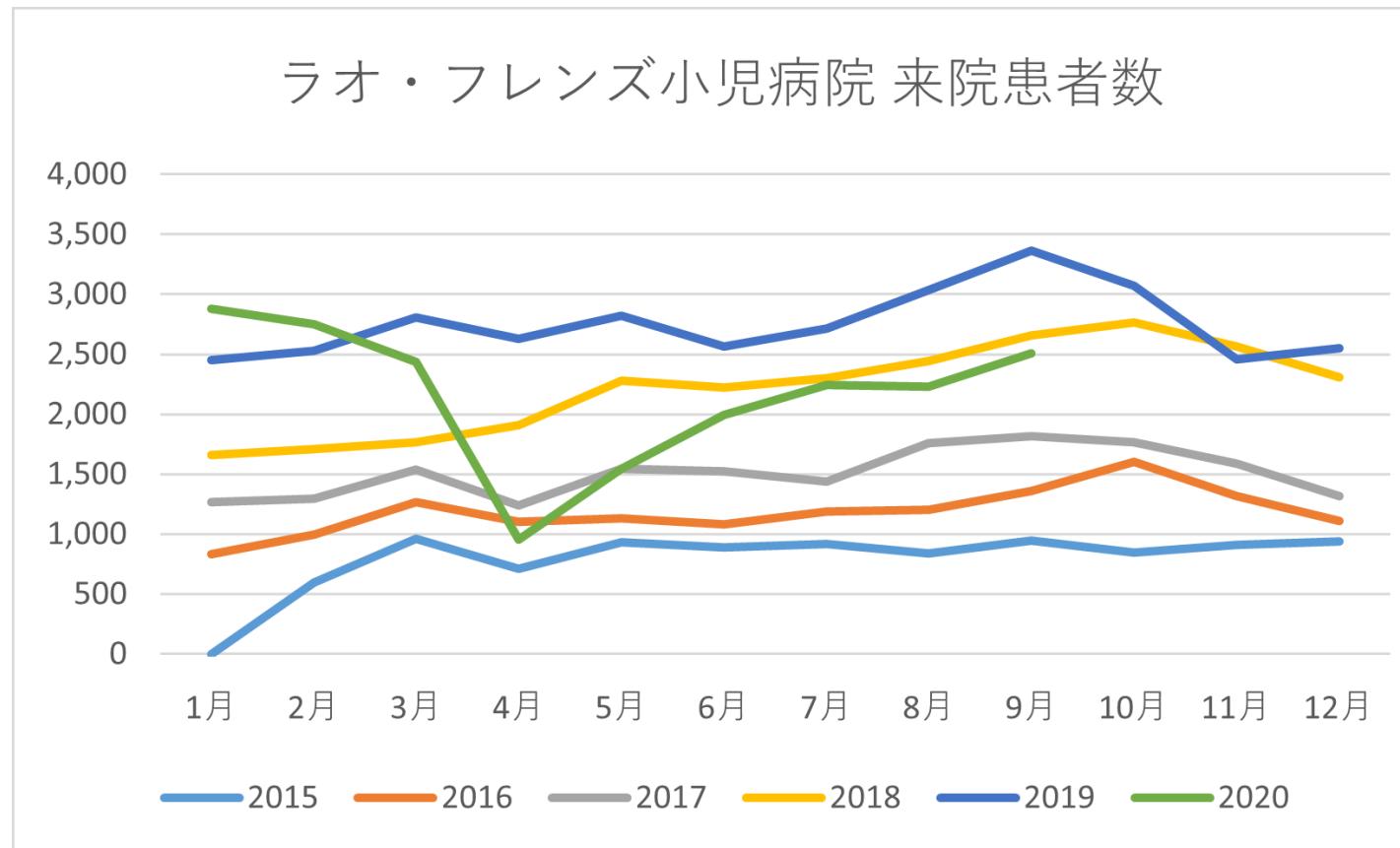
## 2020年の出来事

今年最初の出来事をお送りする予定だった2月から3月にかけて、コロナ感染の世界的な拡大がみられました。ラオスでも3月24日に最初の感染者報告があり、国内外の移動が制限されるロックダウンが行われ、病院の活動にも影響が出てしまいました。その後も感染の拡大が収まることなく今を迎える状況は、誰も予想できなかつたことと思います。しかしその間も、病院は子供の診療を止めることはできません。外国人専門家が緊急帰国してしまった後も、ラオス人スタッフが中心になり、日々来院する患者さん、来院するかもしれない患者さんのために頑張っておりました。

そのような状況下、コロナ感染が落ち着いたらと引き延ばしていた“出来事”によるご報告ですが、送付のチャンスを逸してしまい、既に12月を迎えることとなってしまいました。今年最初で最後の出来事となってしまいますが、ラオ・フレンズ小児病院(LFHC)でのコロナ対応も含め、“変化の時”的な病院の様子をお届けしたいと思います。



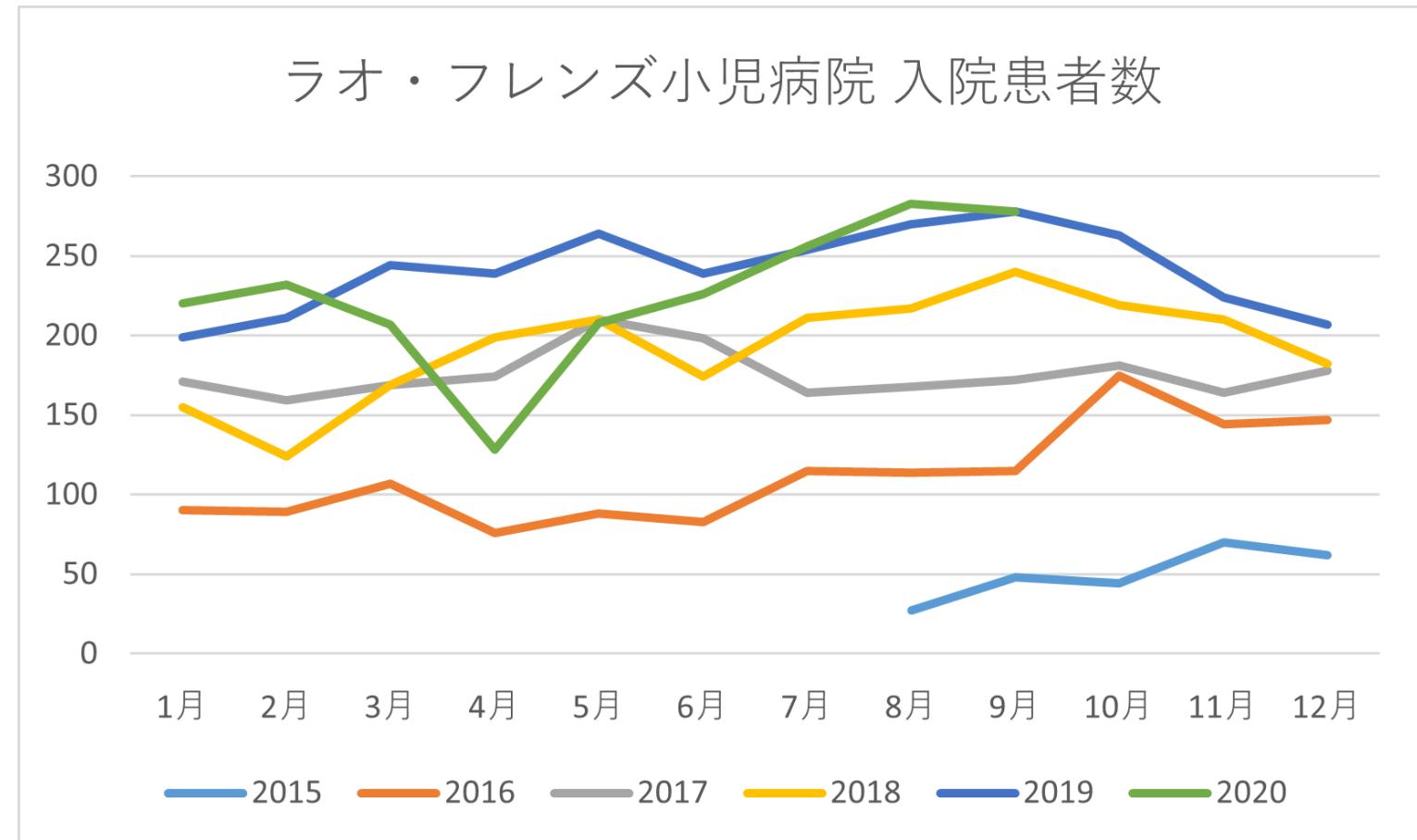
コロナ感染が拡大し始めてからというもの、日々ネガティブなニュースばかりが増え、多くの人が下を向いてしまっているように思いました。そこで、以前から私個人で続けていたブログ上で、“コロナでもいいことあった”シリーズを掲載することに。嬉しかったこと、楽しかったこと、ホッとしたことなど上を向いて歩けるようなお話の掲載を始めました。今回の出来事は主にその中で病院に関わることを抜粋してご紹介したいと思います。



まずは、患者統計からご紹介いたします。こちらは来院患者数の動向です。統計欄では「毎年来院患者数は前年より増えている」とお伝えすることが常でしたが、2020年のラインは3月から下降し、4月に大幅に落ち込んでいます。これは、政府が国外のみならず、国内の移動も厳しく制限するロックダウンを実施したことが反映されています。ロックダウン解除後には徐々に来院患者数も元に戻りつつあり、9月には昨年6月のレベルまで戻っています。



この統計は、入院した患者さんの動向です。こちらもロックダウンにより4月に大きく落ち込みましたが、解除後は一気に増え、前年度の同時期を超えるまでになりました。ロックダウンの間に悪化してしまった子供たちが多くなってしまったのではないか、気になるところです。

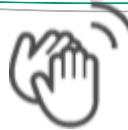




コロナ対策万全



## スーパーマンも手洗いゴシゴシ



先日、手洗い励行がほんとの手洗い励行になったとブログで書いたのですが、昨日から毎朝、外来の患者さんに手洗い指導をするようになりました。まず、手洗いがなぜ必要なのかを説明して、病院の手洗いポスターを使って、指、爪の中、手首までしっかりと洗う方法をステップごとにデモンストレーションします。その後に一人ずつ一緒に洗ってもらいます。今日はちびっこスーパーマンも手洗い練習です。

手洗い後は、特別な手になったかのように腕を伸ばして見上げていました。洗ったら特別な手になる!これ、いいですよね~。みんなに見せびらかしていましたよ。これまで全然根付かなかった『手洗い励行』がこんなに定着するなんて、さすが、コロナパワー!この習慣が根付けば、この国の感染症で苦しむ子が激減するんじゃないかなー。期待しましょう!

ラオスでの最初のコロナ感染報告は3月24日でした。LFHCでもいつ感染者対応をすることになるかわかりません。保健局からの指示で防御ガウン、マスク、ゴーグルにキャップをかぶっての対応となりました。外来では入り口の外でスクリーニングをする体制に配置を変え、またスタッフは感染対策のためのシミュレーショントレーニングをして備えることになりました。

万が一ラオス国内で感染が広がるようなことがあれば、一気に拡大する可能性が高いと予測されます。マスクや手洗いの水さえ入手することが難しい地域が多い上、医療体制も整っていないからです。とにかく、水際で食い止めなければなりません。



## ロックダウンの影響

感染拡大を防ぐため、ラオスでも約1か月のロックダウンが実施されました。国外のみならず、国内の県、郡の移動も制限され、前出のグラフにも表れているように、病院への道も閉ざされてしまいました。また院内の不急の診療（中等度の栄養失調の定期診療、血液疾患“サラセミア”の輸血を必要としない定期診療など）は、一時停止しなければなりませんでした。村の中にはヘルスセンターという初期診療ができる医療施設はありますが、あくまでも初期診療ですので、処置が遅れてしまうことはないかと心配がつのりました。

訪問看護の患者さんの中には、とても気がかりな患者さんもいます。ロックダウンにより訪問看護にも制限が出てしましたが、スタッフで話し合い、患者さんを厳選し、保健局から許可証をもらって訪問を続行しました。



気になっていた訪問看護の患者さんの一人が、生後半年だったPちゃんです。Pちゃんは障がいを持って産まれてきました。ご両親にも障害があります。お母さんは母乳が出なかったので病院から粉ミルクを支援していましたが、粉ミルクの調合をどうしても覚えられません。そこで、1回ずつの粉ミルクを小分けにし、1日6回分をひとまとめにしたものを7日分作って、渡すことにしました（写真左）。その後は1週間毎に、Pちゃんの成長と健康状態を訪問看護でフォロー。同時に、ご両親の服薬に関する管理していました。ロックダウン中ではありましたが、Pちゃん宅へは2週間に1度訪問し、村長さんにも協力を仰ぎながら、何とか乗り切ることができました！よかったです。

## Zoomでミーティングも

私も4月に急遽日本へ戻ることとなり、現地のアウトリーチスタッフとはZoomでやり取りすることになりました。最初は不安そうでしたが、口うるさいおばばがないので、ノビノビしているようでした。見なくていいところは見えないのがちょうどいい距離感ですね。見てしまえば黙っていられない質なので、もしかしたらそれが、スタッフの成長を妨げることになっていたのかも。自分で色々と経験をして、自分で感じることが大事なのだと思います。お陰で頼もしいほど成長しました!Zoom中にパチリ!



## 初オンライン教育セッション



ロックダウンに伴い、ラオス人スタッフを指導するために滞在していた外国人専門家が緊急帰国してしまいました。LFHCの運営は、将来ラオス人だけで活動を継続できるように、現地スタッフを育成することが大きな目的でもあります。スタッフ教育をどうにか継続したいと、日本のロータリークラブのご支援をいただき、オンライン教育のための機材を購入し、新しい教育の形を始めました。



## スタッフの心の成長

スタッフの成長はスキルや知識ばかりではありませんでした。LFHCが一番大事にしているCompassionate care（思いやりのあるケア）の芽生えが各所に見え、とっても嬉しくなりました。一つは、身体の筋力が段々と弱っていく疾患を持つ患者さんK君を楽しませてあげたいと企画した、村の子供たちのためのカーニバル（写真右2枚）。K君は学校が大好きでした。けれども手足の筋力が少しずつ落ちて症状は日々進行し、学校へも行くことができなくなってしまいました。とても明るいK君ですが、訪問の度に寂しそうな表情を見ることが多くなりました。そんなK君が少しでも楽しい時間を過ごせるようなことをしたいと、考えた企画です。ゲームをしたり、ご飯を作ってみんなで食べたり、K君もとても嬉しそう。村長さんはじめ、みんなが協力してできたカーニバルでした。

そして、もう一つは村での健康教育。かなり遠方だったので、農作業からみんなが戻る夜に開催したいということで、1泊2日の出張となりました。その風景が左の写真です。この村に住む患者さんが、病気にかかったことで差別をされてしまいました。その状況を解決したいと、郡の保健担当者と話し合い、この村で差別をなくすための教育をすることになったのです。スタッフがこの二つの出来事を報告してきた時、『誰かのために何かをしたい、することができた喜び』があふれ出るようだったのが、私にとっては大きな喜びでした。「やったね！」と、心でガッツポーズ！





## 地域への貢献



LFHCは、院内での診療はもとより、地域での健康増進・維持への貢献も重要な活動の一つと考えています。今年のコロナのパンデミックを受け、地域のニーズにこたえるべく、市内のレストランでスタッフへ手洗い指導を行いました(写真左上)。その際に用いた、手洗いがしっかりとできていないことが目で見て分かるツール(写真右上)には、みんな驚いていたようです。また、フードフェスティバルでは病院のブースを開設し、手洗いのデモンストレーションを行いました(写真左)。通りがかりの人たちと日常会話を交えながら、ポスターを使って手洗い指導。いずれも、コミュニティとのつながりを感じる良い機会になりました。

## 新人のソーシャルワーカーさんと先輩のチャイルドライフセラピストさん



今年8月に新規雇用となったソーシャルワーカーのブンミー君(写真の左側)をご紹介します。人生初めての仕事に就くことになったブンミー君ですが、その雇用に当たっては、私が日本にいたためリモート面接という形を取らざるを得ませんでした。とてもやさしい物腰と、「明日からでも働けます!」という意欲にピンとくるものがありました。実際、患者さんやご家族の立場に立って考え、対応する姿勢に、院内スタッフからは早くも高い評価が聞こえてきています。写真と一緒に写っているのが、チャイルドセラピストのコクメング君(写真の右側)。彼の子供を惹きつける才能(いや、あれは生まれ持った本質でしょうね)はピカイチ。そんな才能をブンミー君にも感じ取ってもらいたく、一緒に行動をする時間を設けました。コクメング君からあふれ出る“Compassion”的オーラを上手に受け取ることができたブンミー君。これからがとても楽しみです。ソーシャルワーカーとしての知識と能力が彼の“Compassion”で、さらに生きたものになること間違いないですね。



## 孤児院で健康教育

右の写真は、孤児院での健康教育風景です。ラオスには孤児院はあまりないのですが、ここは国が運営している孤児院です。その孤児院で疥癬(ダニによる皮膚感染症)が大発生していました。痒さのあまりかきむしってしまつた部分から化膿し、入院が必要なほど全身症状が出た子が来院したことで事態が判明。集団生活ではこのような感染症は一気に広がりますし、また全員が完治するのはとても大変です。使っているリネンやマット、洋服など全てを一気に洗濯して天日干しし、薬を塗って、全員が疥癬退治に全力を尽くさないと全滅できません。みんなの協力が必要なのですね。まずは孤児院へ行って、子供たちを集めて疥癬についてのお勉強です。写真を見て、お互いに髪の毛をごそごそチェック。意識の高まりには即効性がありましたよ! 根治を目指して、一致団結頑張ってもらいましょう!



ちっちゃんが頑張ってます!



今年は1キロを下回るちっちゃんが元気に退院していった嬉しい年でした。それも、これまでの最低体重を更新する子が次々と訪れました。ラノイちゃん(写真左)は800g、そして、バンマオちゃん(写真右)はなんと600g!

日本でも1キロ以下の赤ちゃんには特別な注意を払いますが、日本の設備には到底及ばないラオスの環境で、スタッフの熱意が命を繋いだと実感します。早産や低体重で生まれた赤ちゃんには、発達上で継続的なフォローアップが必要です。週に1回オープンしている発達クリニックでの定期的なチェックやアウトリーチによる訪問看護で、成長を見守ります。

ラノイちゃんは県外に住んでおり訪問看護ではフォローアップできないため、発達・障がい児クリニックで定期的に発育と発達をチェックしています。先日、クリニックのフォローアップに来ているラノイちゃんを見つけました! びっくりするほど元気で、離乳食を始めて順調に育っています。今のところ発達も問題がなく、スタッフも安心しています。最初は不安そうだったお母さんも、今はとても嬉しそうです。バンマオちゃんの住まいはルアンパバーン県内でしたので、退院後も訪問看護でフォローアップをしていましたが、10月にご両親と2人の兄姉と一緒にラオス南部の県へ引っ越してしまいました。そのため訪問の継続はできませんが、電話で様子を聞いて成長の確認をしています。離乳食を始めて体重も増えているようです。

10月にはもう一人、700グラムの赤ちゃんが入院しました。まだ入院中ではありますが体重は順調に増えており、じきに退院も視野に入りそうです。こうしてちっちゃんがすくすくと育つ姿を病院スタッフが継続的に見ることで、病院スタッフは命の尊さを強く感じるはず。自らの手で命を勝ち取った実感が喜びになり、毎日のモチベーションにつながるのだと思います。

## カムヤイちゃんの成長



昨年からこの出来事でも何回かご報告しているカムヤイちゃんですが、今でも定期的に外来で診察を受けて異常がないかを確認しています。カムヤイちゃんは“乳び胸”を患っていました。母乳や普通の粉ミルクのように脂肪のあるミルクを摂取すると、胸に水が溜まってしまう病気です。ラオスでは入手困難な特別なミルクが必要でしたが、日本のある方からのご厚意でそのミルクを支援していただけることになりました。半年後からは脂肪を含む食品を抜いた離乳食を少しずつ始め、今では普通のご飯を食べられるようになりました。ミルクのご支援は約1年続きました。その方に会えた時にはほんとに嬉しかったです！

また、長期の入院生活ののち、退院のめどが立った時にはみんなでホ～っと胸をなでおろしたものでしたが、まだ引き続きの観察が必要でしたし、100%安堵の気持ちにはなれずにいたのを思い出します。そして、アツという間に1年半を迎えます。こんなに大きくなって、やんちゃんになりました。動画もあるのですが、皆さんにお見せできないのが残念です。お母さんもホッとしていることと思います。それにしても、この笑顔！たまらないですね！カムヤイちゃんの人生の一部にほんの少しでも関わったことを嬉しく思います。そして、これからも元気に育ってくれることを切に願います。

日本国内では



今年のコロナ感染拡大は、世界中の人々にいろんな形で影響を及ぼしました。2次的、3次的な広がりも感じています。

ラオスでは10月に行う予定だった大きなチャリティマラソンイベントが中止になり、コミュニティからのサポートは0に等しい状況です。日本国内においても状況は同様で、予定していたチャリティイベントは全て中止となり、病院運営のサポートが危機に直面する事態に陥りました。そこで急遽、予定していなかったクラウドファンディングを行うことを決め、1か月間、告知、現地報告、オンライントークなど手を尽くして訴え、たくさんの方にご支援いただいたことでゴール達成を遂げることができました。

クラウドファンディングで伝えたかったのは、ラオスの現実です。コロナの感染者数は少ないですが、それ以前からある問題、たとえば十分な食べ物がないために起こる栄養失調や安全な水が手に入らないことによる下痢などは、引き続き健康・命を脅かす大きな問題となっています。もちろんコロナ感染の予防や治療は緊急性が高く、需要も高いことなのですが、命が脅かされるという意味ではラオスの実情も同じ状況なのです。それを“不急かもしれない。でも不要ではない”という言葉で表現して呼びかけました。

この呼びかけにたくさんの方が賛同してくださり、毎回のことですが、言葉では表せないほどの感謝と感激で胸がいっぱいになりました。LFHCはとても小さい病院です。ですから、できることはもちろん限られていますが、その中でも、できる限り一人でも多くの子供たちが笑顔で暮らせるよう、日々努力を続けていこうと思います。皆様のご厚意を決して無駄にはいたしません。ありがとうございます！



ラオスから  
カウントダウン  
してくれた  
ジャイディ  
です。

# 5周年記念式典



Copyright © 2020 Friends Without A Border. All rights reserved.

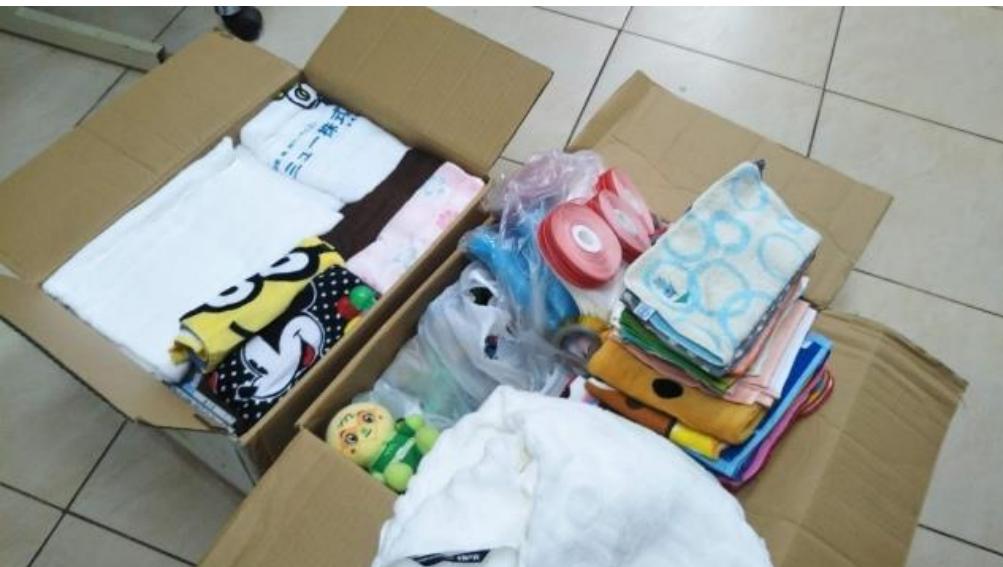
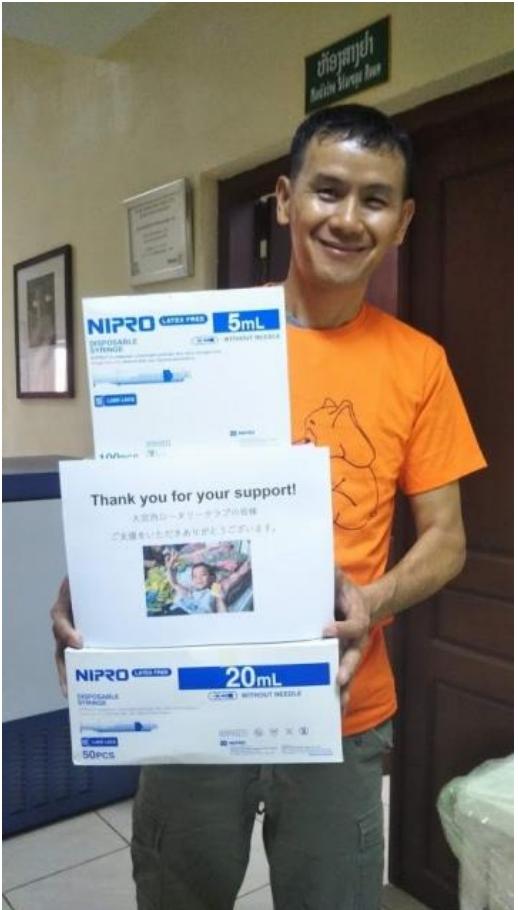
今年はコロナの騒動が頭を占領してしまい、ラオ・フレンズ小児病院(LFHC)の記念すべき5周年記念のことがすっかり遠い昔のように感じられます。

こじんまりとした式典でしたが、恒例の子供カーニバルは開催しましたので、たくさんの子供たちに楽しんでもらうことができました。ちょうど式典の後くらいから、コロナによりとても大変な状況となりましたが、しかしそれは、必ずしもネガティブなことばかりではなかったと思います。転んでもただでは起きないのがフレンズです！

LFHCはもうじき丸6年を迎え、7年目へのスタートとなります。どんな年になるでしょうか。きっと何か良いことがまたあるはずです。

今はみんなが集まってお祝いすることができませんが、ハグして、大声で笑って、1年の成果をみんなで祝える日はもうそこまで来ていると信じています。

たくさんのご寄贈品も



色々な方々から、毎年たくさんのご寄贈品をいただきます。毎日必ず使う注射器、タオル、木琴、輪投げなどのおもちゃ等々。皆さんが「ラオスの子は何が欲しいかな?」「病院で必要な物はないかな?」と頭を悩ませ、色々な形でのサポートを考えてくださることが、とても嬉しいです。

世界中の誰もが大変な1年であったにもかかわらず、ラオスの子供たちのことを忘れずにいてくださいり、感謝の気持ちでいっぱいです。改めて、ありがとうございます!



## モン族のお正月



ラオスには50余りの違う民族の人びとが住んでいます。病院の中にもモン族、カム族、ラオ族、ラオルム族などのスタッフがいて、私たち外国人には、それぞれの文化を知るチャンスにもなっています。民族が違うとお正月も違う時期にお祝いすることがあります。カム族は1月下旬、ラオ族は4月中旬、そして、モン族は12月中旬です。そしてとってもびっくりするのが、昨年もお伝えしたモン族のお正月の風物詩、お餅つきですね。もち米を蒸して、木製の臼へ入れて(写真左)、杵を持ったつき手が2人で交代でぺったんぺったん!(写真中央)そして、十分つけたら、女性がわーっと集まってきて手にゆで卵の黄身を付けて丸めていきます。丸めた後は、バナナの葉っぱでギューッと抑えて(写真右)保存します。写真は赤米でやっていますが、この前に白いもち米でも既に餅がつかっていました。つきたてのホカホカを私もいただきました!サトウキビ砂糖をとろとろにしたものを付けて、いくらでも食べられてしまう恐ろしくおいしいお餅でした。長期保存できるので、卵を付けて揚げたり、そのまま焼いたりしていただきます。民族が違っても、国が違っても、お正月は特別な時ですね。そして、一つの区切りになる気がします。



今年の出来事は1回のみの発行となっていましたが、ここに掲載した出来事はほんの一部です。もっともっとお伝えしたいことがあります、また次の機会にとっておきたいと思います。これを書きながら色々な思いがめぐりました。あまり明るいニュースとして伝わることのないコロナ感染ですが、私たちにたくさん初めてを経験させてくれました。その中でも、この事態がきっかけとなりラオス人スタッフの成長が後押しされる形になったことは、とても喜ばしい事でした。完全な自立にはまだ時間がかかりますが、大きな一歩を二歩、三歩と歩み進められるように、これからもサポートしていきたいと思います。

今年は世界中から笑顔が減ってしまい、豊かなはずの地球が固く縮んじゃったような気がしました。そして人々の心も縮まっちゃったのか、あちらこちらでギスギスとしたコミュニケーションの滞りがあったように感じます。ここでその滞りをすっきりしないと!日々前にしか進めないので、笑顔でいなけりやもったいない!

2021年もこの精神で頑張りたいと思いますので、引き続きどうぞよろしくお願ひいたします!

最後は訪問看護中に出会った水牛さんの水浴びの写真で、皆さんにも癒しを。

ラオ・フレンズ小児病院 看護師 赤尾和美